

オットー・バイト作業所&ザクセンハウゼン強制収容所

オットー・バイト作業所博物館(記念館)

担当：安藤 優子

ミッテ区には、ハッケンシャー・ホーフ (Hackesche Höfe) というギャラリーやカフェ、ショップなどが集まる有名な場所があります。その中庭の一角に Otto Weidt (オットー・バイト) 作業所博物館があります。

Otto Weidt とは、第二次世界大戦中、主に視覚障がいや聴覚障がいのあるユダヤ人を自身の作業所で雇用した「ベルリンのシンドラー」とも呼ばれる人物です。Otto Weidt は、当時ブラシ工場を運営していました。障がいのあるユダヤ人を雇い、彼らに仕事・隠れ家・食事を提供することでユダヤ人が強制収容所へ送られてしまうのを防ごうとしました。この工場で作られたブラシは、戦時中武器を拭くためのブラシでした。そのため、ユダヤ人の強制収容所への送還が始まったときも、Otto Weidt はこの労働の重要性を説明し、工場で働くユダヤ人の同僚たちが強制収容所に送られないよう努めました。多くのユダヤ人が強制収容所へ送られてしまった後も彼は収容所に物資を送るなどし、ユダヤ人を救うため、尽力しました。この博物館では、ユダヤ人の命を守ろうとした Otto Weidt について知ることができます。

この博物館には、当時隠れ家として使われていた部屋がそのままの姿で残されています。この部屋で人々がおびえながら、隠れて暮らしていたことを想像すると胸に迫るものがあります。そして、そのようなことが実際にあったという歴史と向き合わなくてはいけないのだと強く感じました。

ガイドの方からの説明で印象的だったのは、Otto Weidt は当時「パパ Otto Weidt」と呼ばれていたということです。彼はユダヤ人の同僚を尊重して接していたために、工場の雰囲気はとても良かったそうです。そして工場で「パパ」のような役割を果たしていました。

もう 1 つ、印象に残ったことがあります。それは、強制収容所に送られてしまったユダヤ人の同僚が Otto Weidt に宛てた手紙です。その手紙の実物が展示されていました。当時、ナチスの検閲があったため、手紙に自由に言いたいことを書くことは許されませんでした。手紙を送った同僚は食べものを送ってほしかったのですが、それを直接書くことはできませんでした。そのため、「ジャガイモ問屋の Otto Weidt 様」と宛名に書くことで食べものを送ってほしいということを伝えたそうです。どんなに辛い状況に置かれても生きたいと強く思う気持ちとそれに答える Otto Weidt の姿は、心に訴えかけるものがありました。

最後に…。この博物館は学生が卒業記念で作ったそうです。この博物館があるおかげで私たちは勇気ある Otto Weidt のことやユダヤ人の置かれていた状況を知ることができました。同じ学生として尊敬すると同時に、この博物館を通して Otto Weidt の業績とユダヤ人迫害の歴史が後世に語り継がれていくことを願っています。



＜ブラシ工場にあった器具とガイドのローレンツさん＞

おまけ①ユダヤ人ってだれ？

ユダヤ人と聞いて、あなたはどんな人あるいはイメージを思い浮かべるでしょうか。有名なユダヤ人といえば、アインシュタインや作家フランツ・カフカ、心理学者フロイトを挙げた人もいるでしょう。彼らに共通して言えることは、「ユダヤ教を信じているか、信じるのが許されうる」ことくらいで、ユダヤ人を定義することは難しいのです。

しかし、それが容易であった時期もあります。それが第二次世界大戦中でした。ナチス政権によってユダヤ人は特別のパスポートを発行され、名前も、女性なら Shara、男性なら Israel とつけなければならなかったのです。また、ユダヤのあの黄色い星を胸につけることも義務付けられていました。つまり、当時は一目見ただけ、あるいは名前だけでユダヤ人であることがだれにでもわかってしまったのです。Otto に助けられたユダヤ人もその星をつけることが嫌で仕方なかったと語っています。

同じ人間で、それぞれ個性をもった人たちの人権がこのように踏みにじられたことはおそらく想像を超える屈辱、悔しさ、悲しみです。私達現代人が、同じことを絶対 100%繰り返さないと言い切れるでしょうか、差別なく相手を認める努力ができているでしょうか。私はそのようなことを考えさせられました。

担当：渡邊 未奈

ザクセンハウゼン強制収容所

担当：加茂谷 吏絵

ナチス政権が誕生した直後の1933年の3月21日にオラニエンブルクを中心にあった工場を強制収容所とし、オラニエンブルク強制収容所ができた。その後管轄がSS（親衛隊）の下になり一度閉鎖されたが、1934年の7月13日に再開し、1936年の夏までにはザクセンハウゼン収容所が創られた。この収容所は他の収容所の模範となるように目指しており、ナチス政権とSSの絶対的権力の象徴でもあった。1936年から1945年までの間に20万人以上が収容された。初期においてはナチス政権に反対し、政治犯とみなされたものが収容されていたが、すぐにナチスによって人種や障害、同性愛者であるなどの理由で迫害された人々が数多く収容された。1939年までにナチスの占領下にあった他のヨーロッパ諸国から来た何万もの人々は飢えや病気、強制労働や暴力、処刑などによって死んでいった。戦後はソ連軍のキャンプがザクセンハウゼン収容所に移動してきて、彼らもまた強制収容所として使用した。囚人の多くはナチス政権の幹部だったが、政治犯やソ連軍事裁判で逮捕された人々もいた。ナチス政権下と異なるのは性別や年齢を問わず収容されていたことである。この収容所は1950年に閉鎖されるが、それまでの間に約6万人が収容され、そのうちの1万2千人近くは栄養失調で死んでいる。

この強制収容所は二等辺三角形の形をしていて、周囲を3メートルの壁で囲み、その上には高圧電流がながれる鉄線が引いてあった。収容所全体で68棟のバラックが並び、政治家や牧師などが入る独房や、人体実験室などもあった。入り口はAゾーン、収容所の奥にZゾーンがあり、アルファベットの最初と最後も文字を使い、労働（人生）の始まりと終わりを表している。Aゾーンの門には「ARBEIT MACHT FREI（働けば自由になる）」と書いてある。Zゾーンは処刑場でガス室や火葬場などがある。また軍隊用の新しい靴を開発する段階で、強度を確かめるために囚人に靴を履かせて一日中歩かせるための道や、見せしめのための移動式公開処刑場もあった。囚人は全員同じサイズの囚人服を着なければならず、罪状や出身国により色の異なるワッペンを胸に付けなければならなかった。

1993年からは記念博物館として広く一般公開されている。

<Aゾーンといわれる入り口>
“ARBEIT MACHT FREI”
(働けば自由になる)



おまけ②反ユダヤ主義と石

強制収容所と聞けば、おそらく「ナチス」「アウシュビッツ」「毒ガス」などと同時に「ユダヤ人」が連想されるでしょう。実際に収容所で犠牲になったのは、政治犯のほか犯罪者、障害者、ユダヤ人を助けようとした人などもありました。それにも関わらずユダヤ人が犠牲者として一番に連想されるのは、やはりヒトラーが「ユダヤ人根絶」を宣言し、あまりに多くの犠牲者が出たためでしょう。しかし、なぜ「ユダヤ人」だったのでしょか。

その背景には、根強い反ユダヤ主義があったようです。ヨーロッパがキリスト教社会になってから、ユダヤ人は「キリストを殺害した民」として、負のステレオタイプをもたれ、常に差別の対象とされてきました。例えば、高利貸であるとか、好色であるとか、人肉食といういい加減なものもあったようです。そして、ヨーロッパの各国は悪いことがあるとユダヤ人のせいだと決めつけ、迫害を繰り返してきました。反ユダヤ主義者であるヒトラーも、第一次世界大戦に負け、民衆が苦しんでいるのはユダヤ人のせいで、彼らを国内から追放すべきだと主張したのです。また、ドイツのために“ドイツ人”として出兵したユダヤ人に対して、彼らが背後から攻撃してきたから敗戦したとさえ言うてのけました。しかし、こうしたナチスの主張や彼らの独裁が許されたのも民衆の中に少なからず古くからの反ユダヤ主義があったためかもしれません。

ところで、強制収容所ではあちこちに石が置いてある光景を目にします。これは、ここを訪れた人が、ユダヤ人を弔うために置いたものです。残念ながらネオ・ナチと言われる人々がいるのも事実ですが、実に多くの人にはもはや反ユダヤ主義という考えを持っていません。むしろドイツの人々は、戦争で起きたことを悔やみ、戦争責任を自らの運命的な問題として捉え考えています。

一方、私たち日本人はどうでしょうか。本当に平和を願うならば、学校教育の段階から原子力爆弾を落とされた部分だけでなく、アジア諸国に対して何をしたのかということにもきちんと向き合い、考えることが必要なのだと私は思います。

担当：渡邊 未奈

参考：

大澤武男「ユダヤ人最後の楽園 ワイマール共和国の光と影」講談社現代新書 2008

エドゥアルト・フックス著 羽田功訳

「ユダヤ人カリカチュア：風刺画に描かれた『ユダヤ人』」柏書房 1993

青少年センターWerk9

担当：國司 奈緒美・齋藤 裕太

■ Werk9 の概要

一 あらまし

Werk9（ヴェルク ノイン）は青少年が余暇を過ごすためのベルリン市の施設で、文化的な活動の拠点となっています。”Werk”とはドイツ語で「工場」を意味し、内装、外装ともに工場を意識した斬新なデザインとなっています。

Werk9 が対象とする青少年は 14 歳から 27 歳で、日本の学童保育や児童館のイメージとは大きく異なります。どちらかという部活動やサークル活動のための場所を提供する場所、という感覚に近いでしょうか。パーティや BBQ、クラブイベントなどもこの場所で行うことができ、ここで行える活動の自由度はかなり高いといえます。

青少年たちはここで主に音楽や演劇、創作活動などを行っています。Werk9 内で単に音楽や演劇の練習をするだけでなく、時には遠征して講演を行うこともあるそうです。特筆すべきは、音楽を教える講師もまた青少年であり、舞台の裏方も含めてその運営の多くを青少年が行っているということです。



Werk9 の外観。周りには高い建物が多い。



Werk9 の看板。工場をイメージしたデザイン。

一 設備

ここでは、Werk9 にある主な設備について紹介します。

・ ステージ、ホール

演劇や音楽イベントを行えるステージの前には約 200 人（座った場合は約 100 人）を収容できるホールが広がっています。ホールは通常はフリースペースとして使用しており、訪問した日は休憩をしたり、プレゼンを聞いたりする場所として使われていました。

また、舞台裏には本格的な照明器具や DJ 機材などの音楽設備が充実していました。これも青少年が調整などを行っています。



フリースペース。椅子の配置を変えると観客席に。



本格的な DJ 機材

・ バーカウンター

ステージの反対側にはバーカウンターがあり、軽食と飲み物を提供しています。「青少年の施設」としては驚きですが、なんとアルコール飲料も提供しています。ビールの種類が何種類もあったのがドイツらしく印象的でした。

ここでも、カウンター内をきりもりしているのは青少年で、あまり店員-客という関係を意識しませんでした。



バーカウンター。アルコール飲料も扱っている。

・ 防音リハーサル室

バーカウンターの横には防音リハーサル室があり、ギターとベースアンプ、ドラム、マイク、ミキサーなどバンド活動を行うための一通りの設備がそろっています。ここでは、バンドがリハーサル活動を行う他に、青少年を対象とした非常に安価な音楽教室も開かれています。

・ 庭

建物の横には庭があり、テーブルなどを出して BBQ などを行うことができます。訪問日にはここで肉や野菜が振る舞われ、美味しい料理に舌鼓を打ちながら、さらに仲を深めることができました。



BBQ にて

★Info★

Werk9 ホームページ : <http://www.werk9.de>

Werk9 住所 : Markgrafenstr. 26 10117 Berlin

■ 訪問日の様子

ーミッテ区の移民、青少年のサポートに関する説明

Werk9 では、まず議員のシュラーダーさんからミッテ区について、移民についてのお話を聞きました。現在ベルリンで生活する人のうち44.5%の人が移民のバックグラウンドを持っているそうです。つまり様々なバックグラウンドを持った人が共にベルリンで生活しています。青年だけを取り上げると外国にバックグラウンドを持つ人は70%にも及びます。彼らはドイツ語をうまく話すことができない、学校等のシステムになじめないといった問題を抱えています。



シュラーダーさんによる説明の様子

外国にバックグラウンドをもつ40%の子どもに特別なサポートが必要になっているという事実がその問題を裏付けています。そのような問題を解決していくためにベルリン市では様々なサポートを提供しています。ドイツ語をあまり話せない生徒には特別に集中的にドイツ語を学ぶクラスを設けて、彼らが後に他の生徒と同じクラスでドイツ語に不便なく授業を受けられるようサポートすることもその一つです。

このように外国にバックグラウンドを持つ人々が多く暮らすベルリンでは外国人と共生していくために彼等に対してサポートを行っているそうです。シュラーダーさんの話から外国人と共生していこう、外国人も暮らしやすいベルリンを作っていこう、という姿勢がうかがえました。また積極的に外国人にも権利を与えていこうという姿勢が印象的でした。様々な文化を持つ人が共生していくというのは難しいことだと思います。外国人に対してサポートをしていくということももちろん大切ですが、外国人以外にも異なる文化を持った人が共に生活しているという事実をきちんと伝え、正しい文化を理解してもらうことが、お互いを理解し、共生していくうえで大切なのではないかと感じました。

ー音楽を通じた交流

お話を伺った後は、Werk9の方やそこに訪れる青年と音楽を通して交流しました。それぞれがギター、ピアノ、ドラムの中からチャレンジしたい楽器を選んで体験しました。私はドラムを体験しました。ドラムを教えてくださいましたのはパウル先生です。ドラムを選んだメンバーみんなドラムは初体験だったのでドラムスティックの持ち方から学びました。初めはパウル先生の叩くリズムを真似して



ドラムに挑戦！

小さなドラムを両手で叩きました。これは難しくありません。少し慣れてきたら、次は一人ずつドラムセットの前に座って実際にドラムを叩いてみました。初めて近くで見たドラムは思っていたより大きく、存在感がありました。初めは簡単なリズムを叩くだけだったのですが、右手と左手で異なるリズムを叩くということは想像していたよりはるかに難しかったです。頭では分かっているつもりでもなかなかうまく叩けないのです。これにさらにベースドラムを叩く足まで加わると、それぞれ正確にリズムを刻むことができなくなりました。みんな右手、左手、左足で別々のリズムを刻むということに苦戦していました。それからギターを弾けるメンバーが加わり、その場にいたメンバー全員で即興演奏をしました。決して上手な演奏ではありませんでしたが、みんなで演奏するのは楽しいものでした。私はこの体験を通して、音楽はたとえ違う文化を持つ人同士であっても、文化の違いを越えて共に楽しむことができるものだと感じました。音楽を通して一つになることができる、音楽はそんな力を持っているのだと思います。音楽を楽しむ心は世界共通なのだと感じました。即興バンドを組んで音楽を演奏したメンバー同士も一体感が生まれ、更に仲が深まったと思います。



交流会後の BBQ にて

担当：内海 裕子

ドイツ環境省

Bundesministerium für Umwelt, Naturschutz und Reaktorsicherheit

【訪問日時】

9月1日(木)

【住所】

Stresemannstraße 128-130, 10117 Berlin



【環境大国ドイツの歴史】

1970年代前半、ヨーロッパにおける環境汚染の深刻な事態が次々と報告されるようになり、このころからドイツ政府は環境政策に力を入れてきた。1971年に制定された連邦環境計画ではその後の5年間にわたる廃棄物汚染処理や土壌汚染対策、水質保全、自然保護に関する規定が、具体的に国民に提示された。また、シュバルツバルトの森林枯死や、1986年4月におきたチェルノブイリの放射線汚染事故などを契機に国民の環境保護意識も高まっていた。

市民レベルで見ると、70年代から80年代の環境市民運動の中からはさまざまな環境NGOやNPOも生まれ、そのうちのいくつかは、約20万人もの会員からなるドイツ最大の環境自然保護連盟「BUND」、ドイツ自然保護連盟「NABU」(Naturschutzbund)などの大きな団体へと成長した。大きな環境団体にはエネルギー、交通、廃棄物、自然保護などの分野の専門家がいて、連邦や州の議会に呼ばれて意見を述べることもあるし、国の省庁や自治体が環境団体と協力したり、自治体が環境団体に環境教育などの仕事を委託したりする例もよくみられた。

1970年代になると、当時の環境行政に不満を持っていた人や、原発や焼却場などに反対する人が起こした市民運動の中から、各地で環境保護をかかげる政治団体が生まれ、1980年にこれらの団体が一つになって緑の党を結成した。緑の党は1998年にはシュレーダー首相率いる社民党と緑の党で連邦の連立政権を担うまでに発展し、その後の4年間に、環境面でいくつかの重要な法令や方針ができた。一つは再生可能エネルギーによる電力の買い取りと最低価格を定めた「再生可能エネルギー法」で、これにより太陽や風力の発電が活発になり、特に風力発電は他の国を大きく引き離して世界一の発電規模となった。また原発からの脱却を定めた法律や省エネ奨励のための税制、法律、政令もできた。

【コールさんに伺ったお話】

- ◆近年重要視されているのは気候とエネルギーに関する問題で、限られた土壌や資源をどう使っていくのか、ということ。
- ◆ドイツでも2000年ころまでは原発に対してポジティブな世論が大半であったが、近年

は持続可能な再生可能な新エネルギーを増加させることで意見が一致した。また、今年に入り東日本大震災を受け、原発廃止の方向性を明確に打ち出した。しかしそもそも3.11以前から長期にわたって原発についての議論が行われてきており、ここ最近では、事故の可能性を完全に排除することができないことや放射性廃棄物を次世代に残すことへのためらい等から、原発廃止への動きは高まっていた。

- ◆明確な計画として電力消費自体を2050年までに25%減らし、発電における新エネルギーの割合を2020年までに18%、2050年までに60%にしたいと考えている。沖合・内陸共に風力発電設備を増加させることが基本となる。
- ◆新エネルギー法を制定し、4大エネルギー会社に対し助成金を支払うことで、家庭のソーラーパネルの余剰電力等を買電させる働きかけを行った。
- ◆エネルギーを効率的に使用するために、産業界には更なる研究や開発を進めてもらう必要があり、市民レベルでは意識改革を行ってより省エネな商品の消費を促す必要がある。そこで家電に対してエネルギー消費量を示すタグを付け、一目で環境に優しい商品を見つけられるようにしている。
- ◆新エネルギー移行に関しての課題としては、コストが高いこと、早急に増加させる必要があること、場所や時間を選ぶエネルギーが多く不安定な供給になってしまうこと、電力の貯蔵技術が未発達であること等が挙げられる。



異文化家庭菜園見学

担当：峰村 仁子

ベルリン 6 日目の午後、シュトレッカーさんに案内していただきベルリン市内にある家庭菜園に行きました。ここは幼稚園に通う子供から職業訓練を受けようとする子供まで幅広い年齢の子供が集まり学習する場所です。学校の授業のように頭だけを使うのではなく、手はもちろん、目や鼻など全ての感覚を使ってより実践的な学習をする場として 1920 年頃から作られたものです。土が汚いというイメージを持ってしまいがちな都市の子供たちに、土の中に暮らす生物や、遺伝子組み換え、環境といったことに関心を持つきっかけとなってほしいという思いがあるそうです。



私たちが見学に行った時、ちょうど子供たちが木から落ちてしまったリンゴを収穫し、



リンゴジュースを作っていました。その場にいる子供を見るだけでも、様々なバックグラウンドを抱えた子供たちが訪れていることを容易に理解できました。移民が多いドイツで異文化理解について大きな課題になってきますが、りんごジュース作りに取り組む子供たちは皆互いの国籍など気にしないといった様子でした。中には私たちの持つカメラに興味を持った子供もいて、なついてくる子供がとても可愛かったです。

この家庭菜園は特定の子供だけが利用するというわけではなく、年間の訪問件数は約 4 万件になるそうです。街の人々が気軽に立ち寄り利用することもでき、とても開放的な印象を受けました。

またこの施設は環境にも配慮しており、施設内にスウェーデンの伝統的な建築様式を用いた環境小屋が設置されています。この環境小屋は街中でみられる建物とは一風変わっていて、ペンキに植物性の油を使用したり屋根に植物を生やしたりと、建物そのものが環境を考えたものとなっていました。また小屋の周辺にはソーラーパネルや風車が設置されていて、家庭菜園内で使うエネルギーの多くを賄っているそうです。このような施設に幼いころから触れることができる環境がドイツ国民の環境問題に対する高い意識を作り上げているのではないかと感じました。



Berlin Wall Memorial

担当：田主 陽・森村 優

1.施設概要

ベルリンでは様々なところにドイツ分断の残したものを見つけることができますが、かつての壁沿いに走っているベルナウワー通りは、その中でもベルリンの壁に関する資料などが非常に多く残っている場所です。今回私たちはこのベルナウワー通りを歩いて、Berlin Wall Memorial(ベルリンの壁メモリアル)の見学に行きました。

①壁沿いの様々なメモリアル

かつて壁が走っていた場所は地面に彫って残してあることが多いですが、このベルナウワー通りでは当時の壁がそのまま約200mにわたって残っていて、壁沿いに歩いていくと、様々なメモリアルを見つけることができます。特に印象的なものとして、旧東ドイツから西ドイツへ逃亡しようとした人が掘ったトンネルの上にあたる場所に、逃げようとした年とともに地面に刻まれているものがありました。トンネルだけではなく、逃げようとした人について刻んだメモリアルも多くみられ、特に有名なものとして、1961年に有刺鉄線を飛び越えた国境警察官については、壁画としてそのときの写真が残っています。



写真：トンネルの跡

②Documentation Center

ここでは、東西ドイツ分断にまつわる歴史についての映像や資料を見ることができます。また階段を上ると、旧西側から見た壁の様子を実際に高いところから見ることもできました。写真の手前側が西、奥側が東です。



写真：壁の様子

③Chapel of Reconciliation(和解教会)

その後、私たちは壁の建設によって間の無人地帯に入ってしまった教会を見に行きました。これは1985年に東ドイツ側に破壊されてしまった教会ですが、壁の崩壊後にはドイツ分断のシンボルとして同じ場所に再び建設されました。教会の前にはメモリアルがあり、有刺鉄線に囲まれた聖書を挟んで人が抱き合っています。



写真左：和解教会 写真右：メモリアル

2.Enes さんの話

施設見学と並行して、Werk9 やホームパーティーでお会いした Enes さんに壁があった当時の体験をお話しして頂きました。

Enes さんは東ドイツ出身で、小学生のとき社会主義の勉強をしました。「社会主義は皆が幸せになれる」、「資本主義はよくないものだ」と習いましたが、疑問を持ったそうです。当時、学校では自由に意見を言えませんでした。例えば、「フランスに行きたい」と言っただけでも処罰の対象になるのです。集まって話し合いをしていると、警察が来て、話の内容をチェックしました。

壁が崩壊すると、Enes さんは喜びました。しかし、Enes さんの祖父はショックを受けました。ずっと社会主義中心だった生活が突然変わってしまったからです。壁崩壊は人それぞれ捉え方が違ったようです。

その後、Enes さん一家は西ドイツ側に引っ越しました。そこで Enes さんの妹がいじめにあったそうです。理由は東ドイツの出身だからでした。

3.見学を終えて

Berlin Wall Memorial やその周辺では、東ドイツの人々が必死に逃げようとした記録がたくさん展示されています。ドイツ分断の初期は、建物の上階から飛び降りて西ドイツ側に逃げる人たちがいました。当時の逃げる映像が残っており、中には西ドイツの人が助けられている場面もありました。窓は後に塞がれてしまいましたが、トンネルを掘ったり、車に

細工して隠れたりと、さまざまな工夫をして逃亡は続きました。これだけ逃亡の記録があるのだから、壁が崩壊したとき、東ドイツの人たちは皆喜んだだろうと今まで思っていました。しかし、Enes さんの話を聞いて、考え方が変わりました。喜んだ人もいるけれど、悲しみ困惑した人もいたことを知り、時代背景が分かっていなかったと反省しました。壁は 1961 年にできて 1989 年に崩壊するまで 28 年間ドイツを分断していました。その間に青年期を過ごした人にとって、社会主義が社会の当然の仕組みになります。そのことを考えれば、社会主義を絶対視していた人々は、悪しきものと教えられていた資本主義の生活を急に受け入れられないことが分かります。

そして、Enes さんの妹がいじめられたという話を聞いて、壁は同じドイツ人の心も分断してしまっただと感じました。おそらく、西ドイツと東ドイツは統一後も「別の国」というような意識が残っていたと思います。今まで違う思想の生活をしてきたから、習慣も違ったでしょう。西ドイツの人も東ドイツの人が来たことに、最初は戸惑ったのではないのでしょうか。ドイツのように国を分断される危機は日本にもありました。もし、日本も分断されていたらドイツと同じ道を通ったかもしれませぬ。しかし、他の国によって分けられたのに、つらい思いを自分たちがしなくてはならなかったドイツ人たちの胸中を私たち日本人は想像することしかできません。

東ドイツの逃亡者は見つかるとう殺されました。銃で殺された人は 90 人ですが、犠牲者はもっといると思われまふ。壁が作られた大きな原因は第二次世界大戦です。戦争は各国に爪痕を残し、ベルリンの壁はその爪痕のひとつです。ドイツで戦後も悲劇が続いたことを Berlin Wall Memorial は物語っています。悲劇はいじめであったり、殺害であったり、様々な形でドイツ人を苦しめまふ。ドイツ語は分からなくても、「もう二度と同じ過ちを繰り返してはいけない」と訴えていることはよく分かりました。